

季節の分かれ目の前日を「^{せつぶん}節分」と言います。

明治時代の初めまでは、月の運行を基にした太^{もと}陰^{たいいん}曆^{れき}、いわゆる旧暦が用いられていました。その旧暦では一年を二十四に分け、これを“^{にじゅうしせっき}二十四節気”と言います。この中に、季節の分かれ目として“^{りつしゆん}立春”、“^{りつか}立夏”、“^{りつしゆう}立秋”、“^{りつとう}立冬”の四つが含まれています。日本では豆まきの行事が行われる事から“^{りつしゆん}立春”の前日の節分ばかりが注目されますが、「節分」は年に四回あるのです。

この立春の前日の「節分」を有名にした豆まきの行事は、中国から伝わり、日本では室町時代に始まった^{ついな}追儺の儀式に由来します。この^{ついな}追儺の儀式は、元々旧暦の大みそかに行われていました。旧暦では、大みそかと立春は今ほど日数の開きがありませんでした。

現在の新暦が採用されてからは、冬から春へという季節の移り変わりの^{ふしめ}節目として、この立春前日の節分が^{ついな}追儺の儀式を行う日とされました。自分の年齢よりも一つ多く豆を食べるという習慣は、元々旧暦の年越しに行われており、お正月を迎えて一つ年をとるとい^{かぞ}う数え年の^{なごり}習慣の名残だとも考えられています。

この^{ついな}追儺の儀式において、^{えきびょう}疫病や災害などの不幸は“^{おに}鬼”に^{たと}警えられ、^{もたら}罰されると考えられてきました。日本では、“^{おに}鬼”を^{しましま}縞々のパンツをはいた妖怪のような姿として思い浮かべがちですが、漢字の“^{おに}鬼”つまり“^{おに}鬼”は、もともと目に見えない死者、^{れいこん}霊魂、特に^{あくりょう}悪霊を指しています。そしてその漢字に「^{おに}おに」という日本語が当てられました。「^{おに}おに」は古い日本語の「^{おぬ}おぬ」に由来し、^{かく}隠れるという意味を含んでいます。

さらに仏教の世界観に基づいて地獄の番人をモデルにしたという説もあります。目に見えない鬼が、赤鬼や青鬼という恐ろしい妖怪の姿となり、目に見える存在になったことで、^{ついな}追儺の儀式は^{おにばら}鬼払いの行事として定着していったものと思われます。

日本では、秋田県で年末に行われる「^{なまはげ}なまはげ」の行事が有名ですが、最近ではリアルな鬼の姿が敬遠されることもあるそうです。思えば昔から子供の教育のためにお化けや妖怪はしばしば用いられてきました。最近では地獄の絵本が静かなブームとなったり、鬼のアプリも登場したりしています。これらはバーチャルな鬼ですが、「^{なまはげ}なまはげ」の様にリアルな鬼が家へ訪れるという形には歴史を経てきた優れた点

『 禅のころろ - 曹洞宗 - 』

もあると思われます。子供だけでなく、父母や祖父母など家族全員で鬼を家に迎えることで、時に怖がったり、時に会話を交わしあったり、時に泣き笑いしたりする中で、恐怖感はもちろん、連帯感や信頼感を家族全員で分かち合いつつ、目に見えない存在への敬意が^{やしな}養われていくのではないのでしょうか。

“鬼”の姿は時代と共に移り変わりますが、では“鬼”とは一体何なのか、自分の事として考えてみてはいかがでしょうか？

— 終 —